

# 伝えたい

戦後80年  
過去から未来

# 記憶を語り継ぐ

5

父は1933年に警察官として満州へ渡り、私はその3年後に海城で生まれました。一番多い時で両親に叔母、そして私と一人兄弟の12人で楽しく暮らしていました。日本の敗戦を境に地獄のような生活が始まりました。私たちは疎開先で放送を聞きました。ああ負けたんだなとしみじみ思いました。敗戦後の満州はめっちゃくちゃでした。家族でお昼ごはんを食べっていると、外国の人たちが家に土足で入り込んできてピストルを突き付けられた日もあります。彼らは金目の物を奪って出ていきました。私は殺されると思っ

川丘 宮市 野茅 8 眞道千恵子

てひどくおびえ震えていました。父はある日、仕事に行つたきり帰らぬ人となりました。ソ連軍に監禁・連行されたのです。父と引き離され、生活に困るようになったので、私は9歳の時、栗まんじゅうを問屋で仕入れて中国人や裕福な日本人に向い売り始めました。「栗まんじゅうはいかがですか」「栗まんじゅうはいいですか」。誰も買ってくれなくて涙がぼろぼろこぼれる日もありました。

# 敗戦後の満州地獄のような生活



満州での経験を語る眞道千恵子さん

ある日、兄と問屋に行くついで、八た。私たちは問屋の節穴からその路軍と中共軍が戦いを始めました。様子をのぞいていました。ピストル

の撃ち合いになって「どーん、どーん」という音が鳴り響きます。休戦したのを見計らって出てみると、血を流した人が山のように積み重なって事切れていました。私たちは引揚船ロバート・エデン号に乗って日本に帰りました。そこで2歳の妹がエキリ(疫痢)を悪化させて亡くなりました。船長さんが親身になってくださり、妹は毛布に包んで水葬されました。とても悲しい思いがしました。

引き揚げてからしばらくがたった頃、父の爪と髪が届きました。一緒に連行された同僚の方が届けてくださったのです。聞く

と釜山で働かされている中、米糞菜圃になったと聞いて、私をうんとかわいがるしてくれました。奥のところでおなごを空かせたくなつたなら、あまりにひどい話ではありませんか。どんなことがあつても人の命が一番大事です。戦争だけはやっつけたい。戦争はいつかしめなめものもありません。もう一度おんなじことを起こしては行けない。思つた私は「たんなべ」を口頭で書いて親族や同級生に配りました。たんなべは私の母だんなの愛称です。今私には子どもが二人と孫が3人います。彼らがこれからもつらいこと、めづらなことが戦争を経験するところありませんように。心の底から願っています。(聞き手・平岡大輝)